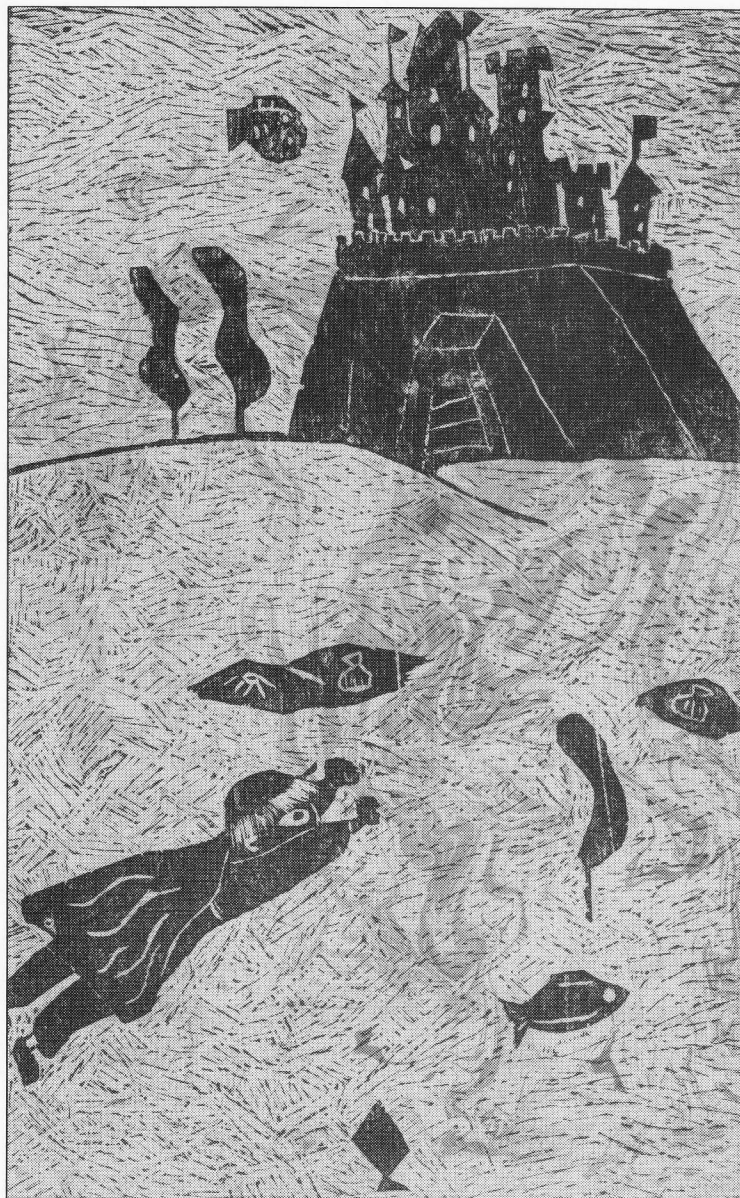




あ！海底におしろが

河田

優

札幌市立山鼻小学校(5年)

第20回北海道教育美術展奨励賞作品

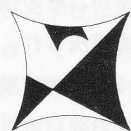
評

マープリングをした紙を効果的に使って、最も単純化したていねいな彫りで、海底の美しいおしろを表現しています。

目次

ようこそ釧路大会へ2
全道に広がる造形教育のネットワークを3
誌上フォーラム「子どもの特性」について・4・5

わたしの学校・わたしの実践6
あらためて美術教育を考える7
サクラクレパス・あとがき8



北海道 造形教育 連盟報

No. 98 1994.7.20 発行

発行 北海道造形教育連盟

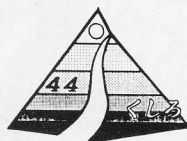
事務局 〒065 札幌市南区真駒内泉町3丁目

札幌市立真駒内南小学校 白井 園 毅

☎011-581-0221



ようこそ釧路大会へ



稲 船 正 男

(標茶町立中茶安別小中学校長)

原始の森や小沼が点在する、北欧的な魅力のある道東の港都市・釧路市で、第44回全道造形教育研究大会が開催されることは、永い間の釧路造形教育研究会の念願でありました。

昭和56年の第31回大会以来、3回目、13年振りであり、全道各地からおいでくださいます皆様を、心から歓迎申し上げます。

第31回の釧路大会では、「創りだす心をよびおこす造形教育」をテーマに、造形活動の喜びをあげあわせるための、いろいろな問題提起や課題が研究されました。そこでは、造形活動の基盤として子どもの心が開かれるための、子どもと子ども、子どもと教師の信頼と連体が不可欠であり、努力の結果得られる成就感こそ、次の創造活動を生み出すものであることの研究の成果が確認されました。

今大会では、昨年の旭川大会のテーマである「思いをあたため、心はずませ、創る喜びを」の成果をふくらませることを継続させるとともに、今までの釧路での研究成果をふまえ、「心ときめく、創造の喜びを求めて」というテーマで開催されます。

子ども一人ひとりの想いや願いを具体化するためには、新たなひらめきを持ちながら造形活動にとりくむ、心の育成を目指して行かなければなりません。

子どもの内なる欲求が造形活動を促し、その活動によって得た力が直感力を刺激し、更に新たな発想を生み出していく・・・そのサイクルを考えると、子どもを中心とする学習活動での教師のサポートや寄り添いを大切にしなければならない、という授業実践をもとに研究を勧めて参りました。

しかし、「言うは易く、行うは難し」の言葉の通り、実践に裏付けされる展開は真に地に這うごとき数年でしたが、未だに継続・模索の段階です。「心ときめく」の想いは、子ども達はもちろん、教師も共に培われて

こそ、造形教育の道標となるべきものと努力している次第です。

先進的な他の地域から比べれば、洗練された巧緻性は若干幼いかも知れませんが、一人ひとりの子ども達の「美」に向かう想は、釧路の子どもにも深いものがあります。

とは言え、この数年間の社会の変化は激しく、「美」に対する感覚の多様化は激化の一途にあります。更に商業化、刺激化、感情表現の激化こそ、より発展的、進歩的であるとの誤った一部の考え方の状態が一般化されつつある今日、子ども達の人間としての感性の退廃につながらなければ心配です。加えて、マルチメディアのなかでインプットされた映像受信能力だけが増大されつつあります。せめて、受像を自分のイメージに創りかえられる感性の成熟を、少しでももってほしいと願わずにはられません。

また今日、地球規模での環境教育も大きな教育課題の一つであります。釧路は昨年の「ラムサール条約締結国会議」を期して、7年後にせまる21世紀に生き躍動するであろう子ども達のため、一層環境教育に力を入れています。

大会2日目、環境庁自然保護局東北地区国立公園野生生物事務所所長の幸丸政明氏による講演、「炎上した太平洋のノアの箱舟」は、氏の体験を通しての立場から、自然を愛し、自然と共生し、自然に生きとし生ける万物の生命から、素直に「美」を感受する心の培いのあり方を示唆してくれるものと思います。

最後になりましたが、参会の皆様には、それぞれの想いや課題をおもちのことと存じますが、その想いや課題が、この釧路大会で多少なりとも解決され、おもち帰りいただき醸成されとともに、2日間の成果が次年度の千歳大会での糧にならんことをお願い申し上げます。

全道に広がる造形教育のネットワークを

—札幌の授業研究にふれて—



北海道造形教育連盟研究部長

菅原 清 貴

(札幌市立三角山小学校)

1. 全道造形教育の輪をひろく深く広げよう

全道に造形教育連盟の支部が18あります。それぞれの支部が地域の特性を生かし、造形教育の先頭に立って奮闘されていることに敬意を表します。

さて、一年に一度全道大会で顔を合わせる造形教育の仲間ですが、分科会やレセプションでお話を交わす機会はあるのですが、それ以上の交流という意外と少なかったと思います。

もっと各地の先生のお顔やお名前を知りたい、日常の授業成果や悩みを交流したいと願って、昨年の旭川大会の席で、各支部の代表の先生方に提案いたしました。

今年度の釧路大会では、もう一步前進させ大会関係者の方のご理解のもと『全道造形教育ネットワーク分科会』を設置していただきました。

この分科会では、

- ・各支部の実情交流
- ・各支部の名簿の取り纏め
- ・連盟研究部作成の造形ビデオの試写会

(各支部に1本提供いたします)

- ・実践事例集『創造21』(研究部作成)に掲載の実践紹介
- ・今後の交流を展望する討議

などを計画しています。各支部から必ず1名はご参加ください。また、上記の内容に関心ある方は自由に参加いただければ一層分科会討議が充実するものと思います。

さて、学校教育も時代の流れの中で再構築の時をむかえています。特に週5日制の完全実施を見通して教科の枠付けを見直す論議や新たなシステムをつくろうとする先行的な取り組みをはじめている学校もでてきています。

中学校・高校の美術選択などの問題も含めて図工・美術の将来像が心配になりつつあります。

子どもの創造性や夢を形や色に表現する造形教育が発展していくことを願って『輪』をひろげましょう。

2. 魅力ある授業をめざして…授業研究の取り組みを

札幌には、札幌市教育研究協議会(札幌研)という組織があり、そこの図工美術部会が各区ごとに活動をしています。年間には、小・中が合同で研究の場を持つ

こともあります。ほとんどが別の活動になっています。

造形連盟の研究部(札幌)では、幼稚園から高等学校までの教師が集う連盟の特長を生かし、札幌研での授業研究とはひと味違った授業をしてみようと3年前より研究部を中心に実践研究を重ねています。

<授業研究の実施状況>

92年 授業研究主題 『教材の可能性と造形能力の発達を考える』

- ・小学校と中学校で同じ題材で実験授業をしました。当然その表現や活動に違いが表れ、教材の与え方や子どもの発達段階を認識する上で貴重な授業となりました。

93年 授業主題 『子どもの遊び心を刺激する造形活動の展開』

- ・子どもの遊び心を刺激する題材の開発を主に、低学年の造形遊びで夏と冬という季節的な条件の違いが子どもの発想をどう変化させるのかを学びました。
- ・研究部員がビデオで記録した「遊び心を刺激する授業」の発表を行いました。

94年 授業主題は93年と同じ

- ・幼稚園における『表現活動』を学び子どもの『遊び心』にさらに迫りたいと8月に計画しています。
- ・研究発表では、幼・小・中・高の教育を一貫して流れるものを探りその価値の検討をします。

この授業研究は、2年を一区切りとして計画されています。連盟でなくては実現できないような独創的な授業研究であり、それが子どもにとって『魅力の場』となることを願って、継続したいと思っています。

3. 釧路色で自分色の授業を期待します

“自らの心をより豊かに拓く造形学習”という連盟の研究主題を考える時、自ら学ぶ意欲・自ら活動する意欲が、より心を豊かにしていく重要な点であることが込められています。その保証をしてあげることで、自分らしさが表出する活動につながると思います。

そこで自信を持ち輝く瞳や表情が動きの中で表出されれば、それが自分色の輝きであり、その輝きが釧路の地域の特性を生かしたものであれば、釧路色の輝きの中で一層美しさを増すでしょう。

子どもの特性を子どもの視点でとらえる教育

—大人の視点での造形教育への警鐘—

札幌市立中央小学校 阿部 宏行

(1) 子供の特性と指導のズレ

①パレットに絵の具を12色並べることが、なぜ身につかないのか？

どの3年生の図工の教科書にも、きれいに並べられた絵の具の写真が掲載されている。これは水彩画の初期の指導として是非とも教科書に掲載してほしいという現場の声があるという。しかし、実際には12色の絵の具もいつかしら4,5色に減っていく。それは、12色の絵の具は全部使われないうまま固まり、使いづらい頑固者になってしまうからである。

そのうちに、子供は絵に応じて色をパレットに出し、混色し始める。でも、先生は決まったように、12色出すことを指導する。「いい色がつくれなくてしょ!」「いい色をつくるためには12色が必要なのよ! 明るい順に!」と…。これでも出さない子供は、先生の言うことを聞かない駄目な子供なのである。子供はいつか「絵を描くこと」がきらいになっていく。どこかで、ズレが起きている。

②だれもがマープリングを経験しないと子供の表現は広がらないの？

子供の思いや願いを表すとき、不思議な世界を表すとき、表現方法を広げるためにマープリング、フロタージュなどのモダンテクニックの技法を学習しようとする。まるで従来の中学校の学習のように行われる。一見楽しい技法遊びも、自分の表したい構成要素として使われ始めると意気消沈してしまう。子供の心の道具として技法が使われているといえるのだろうか。どこかでズレが起きている。

(2) 「指導」という脅迫観念

自分の指導観だけに留まり子供をみようとしないうちや、新しい学力観を振り回し子供の心を忘れて猛進する者がいる。私もその一人のような気がする。

「こうでなければならない」とでもいうべき脅迫観念が頭を支配すると、子供は見えなくなる。子供もその脅迫観念から逃れられず、先生の言うことを聞けない悪い子と自分を追いつめる。絵の具も子供の特性に合わせて、小さなカップを使ったり、共同にしたりとパレットから離れてみることや、子供から生まれる技法とは何かをためさせたりしながら、そこから生み出されるものを認める寛容さがほしいのである。大人の視点で考えた造形教育はいつも寒風にさらされてきた。これからさらされる。

子どもの中に住んでいる特性

札幌市立篠路小学校 熊谷 悦代

私は「特性」です。昔から教育の世界では使われていてとりたてて新しくもないのです。

でも、今回の指導要領改定で私がまたクローズアップされるようになり、どうも居心地がよくありません。

私は子どもたちとのかかわりから言えば特性という二つの熟語で語られるより、「自分らしさ」という言葉で言ってもらった方がわかりやすいかも知れません。

先生方は、私を授業の後、評価ということでなんとか探ろうと大変な思いをされているようです。

私は思うのです。比較できないからこそ「私」なのだ。

熊谷先生が、三角山小学校にいる時、3年生の鑑賞の授業で、私にスポットをあててくれました。

授業の後、先生方から「感じた事、それがすべて…。だったら何でもいいってことかい?」「評価はどうするつもりなんだろうな。」

私はここでもまた混乱をまき起こしてしまったようです。

算数の授業で本一冊の値だんを求める場合には一つの正解があります。「 $300 \div 5 = 60$ 」のように、でも私は、「 $60 = ?$ 」として、「 $60 = 20 + 40$ 」「 $60 = 120 \div 2$ 」「 $60 = 30 \times 2$ 」「 $60 = 20 + 30 + 10$ 」「 $60 = 180 \div 3$ 」というような多様な正解の中の一つなのです。なんでもいいわけではないのです。画家の日野耕之祐氏が「ともこさんへの手紙」の中で、なんでも自分勝手にかけば、「自分らしさ」が出るものではありません。絵の場合でも、まず色が美しいとか、形がおもしろいとか、全体のつり合いがとれているとか、いくつかのどうしても守らなければならない大事な約束ごとがあります。それを守りながら、かきたいというぼくの気持ちを、いかに正直に、正確に絵に表すかということが大事なのです。…それに「自分らしさ」というものは、その人が勉強するにつれて、少しずつ変わっていくものなのです。ともこさんも「自分らしさ」を大事に、少しずつ豊かに育ってってください。と、述べています。

子どもの中に住んでいる私は、変容していくものなのです。

子どもの個性をみかく

札幌市立陵北中学校 角力山 旭

教育美術展の審査基準について話した時のことであるが「賞や入選の果たした作品と翌年の作品が同じような作品の集まる傾向にある……(略)」それで、基準をどう考えたらいいのかが論議されたわけである。優れた作品に近づく、または技術的にまねていくというのも造形の基本的・基礎的な力として必要にも思えるが、私達の指導の中に自分の好みのものだけや自己の制作経験のみでとらえたり、または展覧会用の特別な目的意識から一方的なおしつけの指導観をもってしてしまうことはないだろうか。この特集の主題である個性・特性といった視点から考えてみると、「個性」とは、「個人を他から区別する個別的独自性である」と言われている。それは、かけがいのない自分を大切にすること(存在概念)と生き甲斐をもつ自分(価値概念)であり、代理不可能な自己の実存性を意味している。

今日の教育は生き甲斐を求めて生涯にわたって主体的に学習していく個性を生かした教育が必要とされている。そのためには子どもたち一人一人をよく理解することから始まる。そこには二つの側面があるがその一つに、共通の学習活動をしていてもそこには様々な差が生じてくる。その差が個人間差異(個人差)である。も

う一つは、他の子どもとの比較でなく、その子の諸特性の差異をとらえることである。これが個人内差異である。この二つの側面に表れた差異に対して積極的に子どもにある「よさと可能性」であると解して私達は見取り、支援(援助)していくことが大切なことである。特性は、表面に表れている表情、動作だけでなく内面にある源特性(深層)にまで指導の目をむけていくことが必要である。

こうしたことは私達は本当は十分に承知していることであるが実際の指導の場では難しいことである。

多くの子どもがここでいう「個性」が尊重されることを前提に学習の目的観・価値観をまず見出す場をつくり、さらに学習の要素と素材(教材)をできるだけ選択できるように学習計画を設定することである。個の学習過程が成立するように基礎的・基本的に内容の指導はもちろん徹底し、創造的な表現活動を目指して、柔軟な発想、よく感じ取る力、関心・意欲につながる動機づけ(刺激と援助)を続けていくことである。こうした学習過程の工夫によって主体性が生まれ、おのずと子どもたちの個性がみがかれ自己実現のできる能力を身につけていくことになると思う。この工夫が私たち、造形教育をつかさどる教師の個性とプライドであり、責務である。

子どもの特性と個性

千歳市立東千歳中学校長 宮 川 誠 一

図工・美術科における造形活動では、子どもの発達上の特性を充分ふまえて取り組むことが大切である。

幼稚園児や小学校低学年の子どもの持つ特有の直観の率直さやすばやさ、行動性に着目したいものだ。

まだ認知力や感受力が未分化な時期の子どもたちに対し、指導者は与える教材に反応する色・形そのものに意味を見出し、全身で受け止めて表す活動を多に取り入れることを進めたい。例えば、身近な砂、土、石で積み上げたり、掘ったり、盛りつける等人間の原初的な表現欲求にもとづく造形遊びから始めた方がよいと思う。子どもが全身で素材と完全に一体化した活動経験に浸る中から、次々ともっと変わった事を考え出し、そこから違った意欲や発展が起きてくるはずである。この時期の子どもたちは本質的に遊びそのものが生活のすべてである。今日の生活文化がこれからも一層進んでいくことを考える時、ますます重要な意味をもっていくと思う。人間発達の最も初期段階で夢的な遊び＝造形活動＝生活化を重視することを強調した

い。失ってはならぬ基本的条件である。

従って、子どもたちの生活の経験の中で自分と強くかわらせ、それを中心にしてその思いや感じをもとに色や形で表現を広げることによって生き生きとしてくるのは子どもの特性に沿っているからだと思う。

子どもの生の感じ方をもっともっと大胆に、ありのまま表出させ、子ども自身の思いつきを盛り込ませながらつくりだす活動をさせていきたいものである。

そしてつくる楽しさ、こわして組み立て直す工夫の面白さを純粋に求める観点をもっていきたい。

やがて高学年になり、中学生・高校生になるにつれて主観的表現から客観的表現になり、心象性や合理性さらに芸術性を求めるように変わっていく。しだいに、具象や抽象へのさまざまな広がりや深まりを求めるようになる。造形活動によって感性を養い、磨くために子どもの全人的発達に沿った子どもの特性を発揮させながら創造への欲求を徐々に高め、個性にまで発展できたら、それはめざしている造形教育にアプローチしているものだと思う。

わたしの学校・ わたしの実践

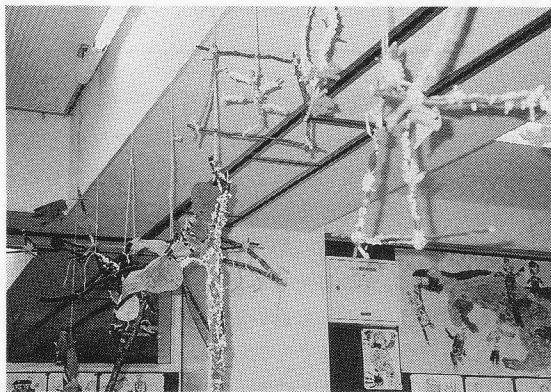


札幌市立山鼻南小学校
益 村 豊

〈自然に抱かれた明るい校舎〉

本校は札幌市中央区の南端に位置し、昨年度市内でちょうど二百番目に開校した新しい小学校です。光が多く取り入れられる近代的な建物で、校木の桜に彩られた明るい校門の向かいには緑あふれる藻岩山が校舎を見守っているかのようです。グラウンドの背景には豊平川にかかるミュンヘン大橋が見えます。このように市民に親しまれている藻岩山と豊平川に挟まれ、都会の中でも自然に恵まれた学校です。

吹き抜けのある玄関ホールに多目的室、自由に入出りできる中庭や天窓のある渡り廊下など解放感あふれる環境に加えて、ワークスペースに向かって壁のない教室が並ぶオープンシステムによる広い学習空間のもとで、現在六百名余りの子供達が伸び伸びと活動しています。



〈開かれた教室を生かした造形活動〉

本校ではオープンシステムを生かした学習活動が盛んに進められています。図工科においてもワークスペースを中心に多様な表現活動の場を設定したり、学年合同の学習の中で一人の子供がより多くの先生に見取ってもらえるよう工夫された授業が取り組まれたりしました。また、移動掲示板や可動壁を活用した作品掲示のほか、置いたりつるしたりする展示など、広い空間を生かした工夫が行われています。体育館廊下の大掲示板や展示棚を使った作品発表や各学年が玄関掲示板の装飾を月ごとに行うなど、学年間の交流も図られて

います。また、季節ごとに絵、焼き物、工作、版画などのテーマを決め、全校で同じ時期に展示することで造形活動への関心や意欲を高める取り組みも行われ、好評を得ています。

〈自然を素材にした造形活動〉

本校では開校当初から、身近にある藻岩山の自然を素材にした造形活動に取り組んでいます。昨年度は、山で広い集めてきた落ち葉や小枝、木の実などを材料にした造形遊びや工作、伝承玩具作り、つたを使ったリース作りなどの実践が各学年で行われました。

開校の年、二年生を受け持った私も、自然を素材にすることが豊かな造形活動の楽しさに結び付くと考え、日頃から学年や学級で訪れていた藻岩山に出かけていき「秋がくれたおくりもの」という造形遊びの授業に取り組みました。秋の落ち葉の変化に富んだ色や形の美しさ、枝木の形のおもしろさなどが二年生の子供達をどのように触発するか楽しみでした。山道を歩きながら材料を広い集めている時から子供達はもう夢中です。材料との触れ合いの中で次第に自分の思いがふくらみ出した子供達は、形や色を何かに見立てたり、自分が思い描いたものを表したり、生き生きと表現活動を進めながら次々と新しい発想や表現方法を生み出していきました。この授業を通じ、自然の素材が持つぬくもりが子供の心を豊かに振り動かす魅力に満ちていることを改めて認識させられました。



今年度、藻岩山に秋がおとずれる頃、今まで取り組んで来た造形活動をさらに進めた「造形広場」の開催を計画中です。自然を素材や題材とした全校の子供達の作品を一堂に集め、子供達はもちろんのこと、父母や地域の人々に公開し、作品に込められた豊かな思いや造形の喜びが交流できることと期待しています。

あらためて美術教育を考える 〈その四〉

札幌市立藻岩中学校長

新 谷 純 鋪

美術教育は、調和のとれた人間形成をねがい、造形の諸能力とともに豊かな感性を育てることにあるが、端的に、造形の体験を通して創造のよろこびを味わわせ、美術を好きにすることにあるものと考えます。

また、この度の教育課程の改定にともない、あらためて「個性重視の教育」が強調されているが、もとより、個性の伸長を図る教育は、われわれ図工・美術科教育の本質であるものと考えます。

しかし、いま一度われわれの実践を問い直してみると、芸術的な成長に段階的な基準を置いて教育課程を編成し教育しようとする、造形能力体系偏重の発想がどこかで優先してしまう傾向、すなわち、標準的な技能習得のための系統的効率的な授業が中心となり、極端には感性や美意識、具体的には子ども一人一人の興味・関心や表現意図までも教え得る指導内容の範疇としてしまっている傾向がないかということである。

少なくとも、子どもそのもののものである感性や美意識は、人間として育て得るものであっても教えて理解させ得るものではなく、子ども自身の興味・関心や表現意図までも一律に扱えるものと過信していたのでは、個性尊重の教育は始めから空論に等しいと思うのである。

いま、あらためて、真に個性の伸長を図る美術教育を推進するには、この教育で育てられる子どもの論理と育てようとする教科の論理を統合し、その表現や鑑賞活動の中で子どもの思考や一人一人の持ち味を生かし得る、子どもの造形意欲や表現意図が生きる弾力的で多様な教育課程を編成し実践しなければならない。

そのためには、現代社会に生きる子どもの造形的欲求と豊かな感性を身に付けて創造的に生きる子どもを願う教育の期待、子どもの造形に関わる発達の過程と教科として用意された造形諸能力育成の体系、現実的には、各学校における子どもの造形意識と教師の指導観など、その狭間にあって個性重視の教育を阻害している隘路を明らかにし、子ども自らが生活欲求としての造形意欲を持ち、創意工夫して創造の喜びが味わえる授業を創造することである。

この授業における教師の役割は、子どもの自由な発

想や構想が生きる題材の準備と多様な造形欲求に対応する知的・技能的な支援であり、さらに、その創造活動を最後まで保障する形成的評価と弾力的な指導であり、飽くなき激励にある。

ここで、選択は模倣から発展した子どもの創造の過程であるとして、自分の意思で選択できる学習場面を設定した授業の実践を試みる。題材の目標に照らして、子どもは、自分の興味・関心、意見や主張、ときには驚きや願望、訴えや気分などを主題とするが、その表現意欲と追及の過程、そして主題の実現には、きわめて個性的な活動が期待できるものとして次のように計画してみる。

- ・題材の中に、いくつかの教材を組み込み、子どもが自分の表現主題や発想で選択できるようにする。
- ・一人一人が自分の主題追及に相応しい表現方法・手段を選択（構想）できるようにする。
- ・表現内容を限定した題材（「希望」とか）では、表現領域（絵画・彫刻とか）を選択できるようにする。
- ・表現素材を限定した題材（風景とか）では、表現内容（テーマなど）を自由にする。
- ・表現領域を限定した題材（彫刻とか）では、表現素材を自由に選択できるようにする。
- ・子どもが必要としたとき、いくつかの知識や技能を提示して適切に選択できるようにする。

個性を尊重し、一人一人の創造の喜びを味わわせる教科の確立を図るには、基本的に、子どもの表現意思としての「主題」を中心とした授業を展開し、あくまでも主題を追及させ、主題を実現させるための指導と評価の一体化を図ることである。その学習の成果は、一人一人の主題に照らして、追及の過程における造形能力の開発の状況とともに評価できるものと考えます。

教育課程の改定のときに当たって、個性の教育は図工・美術科の本質であることから、人間本来の創造性に関わりかならずや可能であると考え、他の教科がこの教育への正面からの取り組みにいかんが逡巡しようとも、われわれは恐れずに実践し、その成果を示して、教育改革実現への先鞭をとらなくてはならないときであると思うのである。

発色鮮やか広がるアート

ニューサクラカラー



パネル制作



色も豊富に25色



600ml
ポリビン容器入

WATER
PROOF
耐水性

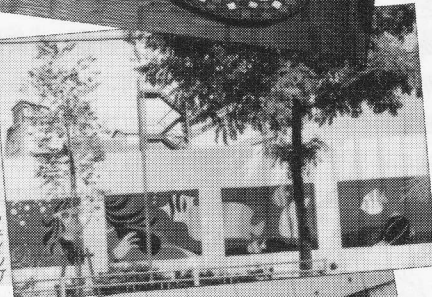
特長

サクラニューカラーは、水溶性樹脂(アクリルエマルジョン)配合の木や布・石・金属・プラスチック・発泡スチロールと幅広い対象物に使用できる新しいタイプの絵の具です。

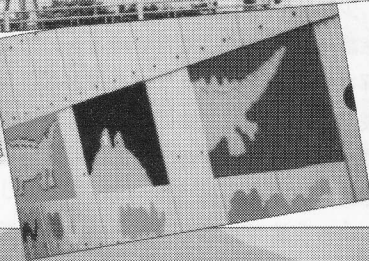
用途

共同制作、屋外展示作品、パネル、看板
店頭広告、舞台装飾、室内装飾 etc.

建設現場フェイルドペインティング



倉庫壁面装飾



防波堤を使つての壁面制作

石・金属・プラスチックにもかける
ニューサクラカラー



株式会社 サクラクレパス

大阪 〒537 大阪市東区中道1-10-17
東京 〒111 東京都台東区蔵前3-20-2
札幌 〒064 札幌市中央区南4条西13-1-26
名古屋 〒462 名古屋市中区平安通1-5
九州 〒812 福岡市南区住吉5-5-15

TEL(06) 972-1241(代)
TEL(03) 3862-3911(代)
TEL(011) 553-9181(代)
TEL(052) 991-7641(代)
TEL(092) 474-1182(代)

商品名	単位	小売価格
しろ	ETPW# 50	1,100円
きいろ	ETPW# 3	1,100円
あか	ETPW# 18	1,300円
みどり	ETPW# 29	1,300円
あお	ETPW# 36	1,100円
くろ	ETPW# 48	1,300円
やまぶきいろ	ETPW# 4	1,100円
ちやいろ	ETPW# 12	1,100円
しやいろ	ETPW# 19	1,300円
やまぶきブルー	ETPW# 25	1,100円
きみどり	ETPW# 27	1,100円
あかむらさき	ETPW# 124	1,500円
だいだいいろ	ETPW# 5	1,300円
はないろ	ETPW# 7	1,100円
おうどいろ	ETPW# 15	1,100円
ピンク	ETPW# 20	1,300円
ふかみどり	ETPW# 30	1,300円
くんじょういろ	ETPW# 38	1,300円
しもいろ	ETPW# 2	1,100円
こげいろ	ETPW# 17	1,100円
むらさき	ETPW# 24	1,300円
あいいろ	ETPW# 43	1,100円
ローズ	ETPW# 120	1,300円
そらいろ	ETPW# 105	1,100円
オペラレッド	ETPW# 121	1,500円

あとがき

太古から吹いてくるような湿原の風の中で、釧路大会が開かれる。原点と未来の双方を見つめ磨き合いの中で新しい美術教育は進む。

中居正光(東札幌小) 元茂章子(美しが丘小) 今 裕子(真駒内緑小) 伊藤 尚(上野幌中) 毛馬内國夫(桑園小)